

## 中央大学史資料集第四集の発行にあたって

昨年十一月の第三集の刊行に続き、ここに「資料集」第四集の発刊をみることができました。本資料集は、本学創立者の一人で、明治二十四年から二十一年間の長期にわたり本学の院長・学長を務めた菊池武夫の関係史料の第一冊として、菊池武夫の発信・受信した書簡を収録したものであります。

菊池武夫は現在あまり知られていませんが、当時は明治期第一級の弁護士として著名な人物でした。明治初年に、東京大学の前身校で学んだ後、明治八年（一八七五）から五年間、文部省第一回留学生の一人として米国で、英米法とその実地応用を学びました。同行の小村寿太郎や鳩山和夫などと同じく、帰国後には政府の若手官僚の一人として活躍しましたが、明治二十四年（一八九一）に司法省民事局長を辞めて在野法曹の道を歩みました。この間東京大学法学部の講師を務め、また私立英吉利法律学校の創設に参画するなど、日本における法律の実地応用と法律家の養成にも力をそそぎました。菊池の性格は温厚篤実であり、その「質実」な生活ぶりについては弟子やまわりの同僚たちによって多くの言葉で伝えられています。しかし、菊池が、なぜ法律家の道を目指したのか、何を留学で学んだのか、についてはこれまでよく分かっていませんでした。本資料集に収録した史料は、明治四年からはじまり、米国留学中の時期もカバーしており、菊池武夫の人物像を再現するための絶好の史料であります。本学創立者の若き日々の研鑽する姿が見えてくるものと思います。

本資料集はさらに、明治初年の学生生活の様子や、留学生の留学生生活を具体的に伝える点で、我国の教育史研究などの基礎資料ともなるものです。第三集で収録した史料と突き合わせていけば、一層多くのことが明らかになるものと確信いたします。より多くの研究者に利用されることを願うものです。

百年史編集委員会専門委員会では、引き続き菊池武夫関係史料の整理を進め、日記や関係書類をまとめて、資料集に収録していく予定です。

菊池武夫の関係史料を大切に保存して来られ、本学百年史のために史料をご提供いただいた、菊池英子氏、蘆野みち氏、友田靖子氏の三氏をはじめ関係者各位に、心からの謝意を表するものであります。

一九八九年三月

専門委員会主査

菅野芳彦